

保守革命と黙示録

—「没落」の不安と「ライヒ」の勃興

稲葉 瑛 志

1. 保守革命とはなにか

1-1. 保守革命の心性

本章の目的は、保守革命に共通してみられる歴史思想を明らかにすることである。国民国家の「没落」の不安と「ライヒ」勃興の期待という二つの黙示録的歴史思想のテーマが、「古典的近代の危機」の時代における政治的課題といかにして結びついたのであるのかについて解明することを課題とする。

保守革命とは、第一次世界大戦の敗戦とドイツ革命による帝政の崩壊後、反議会制民主主義・反自由主義・反ヴェルサイユ体制・反ヴァイマル共和国の旗のもとに生まれた、反市民的性格をもつドイツ青年ナショナリストの運動である。S・プロイアーは、保守革命研究に一石を投じた『保守革命の解剖学 (Anatomie der konservativen Revolution)』(1993)において、その思想を近代に対する反動ではなく、過度な近代化に抗するオルタナティブな近代の模索という観点から論じた。そして保守革命の統一的な心性を、「黙示録の思想、暴力も辞さない態度、男性同盟的気質の複合体 (Kombination von Apokalyptik, Gewaltbereitschaft und Männerbündlertum)」¹⁾として提示した。

保守革命の思想家たちは黙示録的世界観にたち、大戦を「古い時代」と「新しい時代」の分岐点とみなし、ドイツの敗戦を新たな時代を迎えるまでの暫定的な結果として受け入れた。また、戦争体験、とりわけ前線体験は、19世紀の市民社会の束縛からの生の解放を熱望する彼らに「ドイツ的人間」の新しい倫理と男らしい共同体の実現を予感させ、彼らはその実現のためには「暴力も辞さない態度」を表明したのである。

こうした保守革命とナチズムとの関係をめぐる評価は、いまだはっきりとしないところがある。たとえば、2008年に刊行された岩波書店の『社会思想事典』における「保守主義」の項目には「ナチスの「保守革命」という表現が使われており²⁾、ナチズムと保守革命との無自覚な同一視が思想史研究においてもなお根深いことが伺える。この表現自体が軽率であることに違いはないが、反対に保守革命とナチズムの影響関係を否定することもできないのである。

歴史学者K・D・ブラッハーはナチズムの権威主義的国家像を詳細に論じた古典的研究『ドイツの独裁 (Die deutsche Diktatur)』(1969)のなかで保守革命を、「国民社会主義を準備した者にしてその情報提供者であり、意識的にせよ無意識的にせよ国民社会主義の協力者³⁾であった

と批判した。この数年後に保守革命のイデオロギーを「兵士のナショナリズム (soldatischer Nationalismus)」と名づけ、その心性を論じたK・プリュムは、「保守革命は、ひっきりなしに論争を挑み、民主主義の弱体化と崩壊に本質的な関与をした」⁴⁾ことを強調し、ブラッハーよりもきびしい態度でそれを批判したのであった。

ナチズムの先駆者という保守革命の評価は、1970年代以前から、非合理主義や反民主主義、「ライヒ」のイデオロギー、フェルキッシュなナショナリズムなどの重要な研究のなかで強固になっていった⁵⁾。その際、どの研究でも批判の念頭に置かれたのは、保守革命の思想を、ナチズムのイデオロギーとは峻別されるべきものとして論じた思想家アルミン・モーラーの『ドイツにおける保守革命 (Die konservative Revolution in Deutschland)』(1950)であった⁶⁾。

1-2. モーラーの保守革命論とナチズムの関係をめぐって

モーラーは保守革命を「フェルキッシュ派 (Völkische)」「青年保守主義派 (Jungkonservative)」「国民革命派 (Nationalrevolutionäre)」「同盟青年派 (Bündische)」「ラントfolk運動 (Landvolkbewegung)」という5つのグループに分類した。

第一のグループ「フェルキッシュ派」は、人種という生物学的な根拠にもとづき、古代ゲルマンからの文化的遺産を受け継ぐドイツ人がドイツ民族共同体の構成員であることに意義をおく。代表的な思想家には、イギリスの政治評論家で人種主義の観点から反ユダヤ主義的思想を唱えたヒューストン・ステュアート・チェンバレン (1855-1927)、ナチスの人種主義的イデオロギーを強固にした人種学者ハンス・フリードリッヒ・カール・ギュンター (1891-1968)、歴史学者ヘルマン・ヴィルト (1885-1981) などがいる⁷⁾。

第二の「青年保守主義派」は、人種や言語にもとづく民族共同体を主張するのではなく、キリスト教的世界観のもとで「ライヒ」思想を展開したグループである。彼らは、公的な政治領域で発言をする傾向があり、目下の政治状況のなかで「ライヒ」の復活を求めた。『西洋の没落 (Der Untergang des Abendlandes)』(1918/1922)の著者オスヴァルト・シュペングラー (1880-1936)、ヴァイマル共和国末期の首相フランツ・フォン・パーペンの秘書をつとめた政治思想家エトガル・ユリウス・ユング (1894-1934)、ナチスの膨張主義の標語になった小説『土地なき民 (Volk ohne Raum)』(1926)を執筆した作家ハンス・グリム (1875-1959)、そして何よりも「第三のライヒ (das dritte Reich)」を唱えた思想家アルトゥール・メラール・ファン・デン・ブルック (1876-1925)がこのグループに分類される⁸⁾。

第三の「国民革命派」には前線世代の思想家たちが分類され、彼らは極右と極左の思想のからまりから生まれた行動主義的ナショナリズムを掲げた。代表的な思想家としては、モーラー自身が秘書をつとめた思想家・作家エルンスト・ユンガー (1895-1998)、彼の弟で詩人のフリードリッヒ・ゲオルク・ユンガー (1898-1977)、ナショナル・ボルシェヴィズムの政治思想家エルンスト・ニーキッシュ (1889-1967)、エルンスト・ユンガーが編集者をつとめた雑誌『アルミニウス (Arminius)』の出版者であった宗教思想家フリードリッヒ・ヒールシャー (1902-1990)、

ヴァイマル共和国の外相ヴァルター・ラーテナウ暗殺に関与し、極右の暗殺結社「コンズル (Consul)」の一員であった作家エルンスト・フォン・ザロモン (1902-1972) などが挙げられる⁹⁾。

第四のグループ「同盟青年派」は、ヴァンダーフォーゲルなどの青年運動から派生し、ギムナジウムの生徒や大学生からなる男性同盟的なエリート青年の集団である。彼らはヴァイマル共和国の政治体制のなかで大戦以前と変わらぬ「老人の支配」に反抗し、「青年の国」をもとめて世代間闘争を強めた¹⁰⁾。

最後のグループ「ラントfolk運動」は、1928年に窮乏化したシュレーズヴィヒ・ホルシュタイン州の農民の負債問題から大規模に展開された運動である。この運動には「国民革命派」のザロモン兄弟と極右の活動家たちが加勢し、爆弾テロ事件にまで発展した¹¹⁾。

モーラーはこのような分類の上で保守革命を、「19世紀以来放置されている廢墟を一掃し、生の新しい秩序を創造しようとする精神的な革新運動」¹²⁾として規定した。ことさらにドイツにおける「精神的な革新運動」が存在したことを主張するモーラーの意図は、フランス革命とそれ以降に世界を席卷した西欧思想に対する抵抗という意味合いをドイツの保守革命に付与することにある。

というのも、革命はいずれも革命そのものと同時に、それを粉砕しようとする対抗勢力を生み出すからである。そしてフランス革命で勝利をおさめたのはこの世界であった。つまり、「保守革命」にとっての本来的な敵としてあらわれた世界のことである。われわれは本書でそれを、段階的な進歩を信じ込み、あらゆる事物、関係性、出来事などを理性の尺度で測れると思ひ込み、いかなる対象物も孤立化させて頭のなかで理解しようとする世界として書き改めたいのである。[強調は原文]¹³⁾

モーラーの主張にしたがうなら、詩人フーゴー・フォン・ホーフマンスタール (1874-1929) やメラー、ユング、ユンガー兄弟など、1920年代に保守革命を掲げた思想家に共通してみられたのは、19世紀を特徴づける自由主義的かつ民主主義的な世界——ヴィルヘルム時代に象徴されるようなきわめて凡庸で俗物的な世界——に対する抵抗の姿勢である。モーラーはこのように、フランス革命を起点とする近代西欧思想史とは異なるもうひとつの精神史を発見しようと試みたのであったが、その論はこれまで多くの批判にさらされてきた。そのなかでも本章と関係の深い二点に焦点をあわせて検討することにする。

第一に、モーラーの保守革命の思想的理解にとりわけ決定的な破綻をきたしかねないのが、保守革命の歴史観についてである。その思想的理解においてモーラーは、保守革命の精神的な血脈をつきとめようと苦心した。その結果、彼はフリードリヒ・ニーチェを保守革命の始祖にすえ、「永劫回帰」の思想に保守革命の共通の歴史観をみようとしたのである¹⁴⁾。モーラーはニーチェの「永劫回帰」を独自の図像的な概念に変換し、保守革命の歴史観を、キリスト教的な「直

線 (Linie)」イメージの進歩史観に対置される「球体 (Kugel)」イメージの異教的な循環史観であると主張した¹⁵⁾。だが、保守革命の思想家の多くがプロテスタント系の出自であり、キリスト教的世界観を受け継いでいたというプロイアーの指摘をまつまでもなく¹⁶⁾、カトリック思想の影響下でみずからの政治神学を唱えた政治思想家カール・シュミット (1888-1985) を挙げるだけでもこの主張の説得力は失われてしまう。

第二に、保守革命とナチズムとの思想的距離についてのモーラーの見解もまた、論拠不十分で独断的なものである。モーラーは保守革命を「国民社会主義のトロツキスト (Trotzkisten des Nationalsozialismus)」¹⁷⁾と名づけ、保守革命がナチズムとあたかも関係のないように描こうとした——実際には反ヴァイマルや反自由主義などの共通の主張があったにもかかわらず、である¹⁸⁾。しかしながら保守革命とナチズムとの思想的距離が、保守革命の各グループ間の思想的距離よりも離れていたかについてはいまだ不明瞭であり、このことは少なくとも個々の思想家の詳細な比較検討の上で結論づけられなければならない。それに加えて、当のエルンスト・ユンガーが、ナチズムを保守革命の思想圏から排除したわけではけっしてなく、むしろ保守革命の劣化版という意味合いをこめて「ミュンヘン派 (Münchener Schule)」¹⁹⁾と呼んでいた事情も慎重に考慮すべきである。

1-3. 本章の視座

以上の二点から、モーラーは保守革命の多様性を描き出してくれたが、それに対する思想的評価は、西欧思想とナチズムとは異なる、ドイツにおけるもうひとつの思想という点を強調するあまり、恣意的なものだといわざるをえない。

これに対して本章は、ドイツ保守主義の精神史における保守革命の位置づけを再測定すると同時に、保守革命の思想家たちがもっていた同時代言説から、彼らの歴史思想の全体像を示すことにする。

具体的な本章の流れとしてはまず、プロイアーの『保守革命の解剖学』を参照し、彼らのナショナリズムの意味を把握することから始めよう。さらに、プロイアーの保守主義理解を批判することで、保守革命を旧来の保守主義とは断絶した思想として捉えてしまう危険を回避する。それに加えて、近代の「危機」に直面したときの保守革命の自己省察を検討することによって、彼らが保守主義の歴史的な「最終段階」である所以を明らかにする (第二・三節)。次に、保守革命の思想家全体に多大な影響を与えたシュペングラーの『西洋の没落』とメラーの『第三のライヒ』を中心に保守革命の歴史思想を把握する。そして、国民国家の「没落」と「ライヒ」の勃興という保守革命の黙示録的歴史思想の二つの主題を抽出し、その内的論理を明らかにする (第四・五節)。

2. 1920年代の同時代言説としての保守革命

2-1. プロイアーによる保守革命概念の放棄と「新しいナショナリズム」

保守革命には統一的な教義もなく機関紙もないため、そこから共通の思想を抽出することはきわめて困難である。さしあたってその研究史においては——小野清美が『保守革命とナチズム』（2004）で指摘したように——1990年代以降、近年の研究に決定的な影響を与えたプロイアーの『保守革命の解剖学』を転換点に、保守革命を近代思想としてではなく、近代性のなかに位置づけて理解する傾向が主流になる²⁰⁾。

その画期的な研究書の序文で、「保守革命という相反する言葉の結びつきは、近代精神史の叙述のうちでもっともみりゆたかな創作のひとつである」[強調は原文]²¹⁾と特徴づけておきながらも、プロイアーはしかし、この矛盾した概念が、もはや保守的とはいいがたい思想家たちの心性を分析するとき誤解を招きやすく、精神史的考察としても有効ではないと判断した。そして保守革命という概念に代わって「新しいナショナリズム (neuer Nationalismus)」という概念をこの精神運動に提案した²²⁾。

プロイアーによれば、「新しいナショナリズム」は、旧来のドイツのナショナリズム——ヴェルヘルム期の自由主義的なナショナリズム——と以下の三点で異なる。まず、「国民 (Nation)」の概念にカリスマ的な意味が付与されていることである。ドイツ国民は政治的主体としてだけでなく、他の西欧諸国民にはない世界史的使命をもつカリスマ的な存在として理解されている²³⁾。次に、国民概念がエリート層のみならず中間層や労働者層など社会階層のすべてを含み、「全体論的 (holistisch)」に理解されていることである。ハンス・ツェラー (1899-1966) が大衆のために社会的公正をうったえ、エルンスト・ユンガーが第一次世界大戦におけるドイツの「総動員」の失敗を国民概念からの労働者層の排除にみたように、「新しいナショナリズム」は、あらゆる社会階層を包括するナショナリズムを求めていた²⁴⁾。最後に、彼らが革命的であったことが指摘される。それは、ヨーロッパの中心としてのカリスマ意識に目覚めたドイツ国民が、旧来の政治形態を「右からの革命」(フライヤー)によって新しいものへと刷新するという主張であった²⁵⁾。

こうしてプロイアーは、この運動がもはや保守的ではなくなったという理由から、保守革命の概念に代わる「新しいナショナリズム」の概念を提案した。ただしこの概念修正が妥当かどうかは、彼の保守主義理解の正しさにかかっている。保守主義についての重要な研究が多く存在するなかで、プロイアーが依拠しているのは、哲学者P・コンディリスの『保守主義 (Konservatismus)』（1986）である²⁶⁾。コンディリスによると、保守主義は、ヨーロッパの旧市民社会 (*societas civilis*) における唯一の指導的立場であった貴族の精神的態度と同一であり、身分制社会の衰退と貴族という身分がもつ政治的意味の喪失はパラレルにおこった²⁷⁾。そのため、1871年のドイツ帝国成立以降、この意味での保守主義は政治的領域において本来の力を発揮しえないことになる。それゆえ保守主義を20世紀の政治思想に見出そうとすることは、少なくとも

もコンディリスの学問的観点からみると、ナンセンスにうつる²⁸⁾。

しかし、A・ドルンハイムが指摘していたように、コンディリスが問題しているのは「前近代の保守主義または国家に敵対的で批判的な保守主義」²⁹⁾のことであり、つまるところ歴史の一時期における一階級に限定された保守主義の態度のことである。したがって、保守革命をドイツ精神史の流れに位置づけるのであれば、歴史的に限定されたコンディリスの保守主義の概念に依拠する必然性はなく、また効果的ともいえない。なるほどエルンスト・ユンガーは1920年代後半の自身の政治的立場を「新しいナショナリズム」と表明していたが³⁰⁾、それは概念として用いるにはあまりに一般性が高すぎるのである。

2-2. 「危機」に応答する思想としての保守主義

こうした概念規定をめぐって重要なのは、20世紀のドイツ精神史において保守革命という立場の表明が、まぎれもなくひとつの同時代言説を形成していたことである。トーマス・マン(1875-1955)やホーフマンスタールの「保守革命 (konservative Revolution)」、ハンス・フライヤーの「右からの革命 (Revolution von rechts)」³¹⁾、ユングの「ドイツの革命 (deutsche Revolution)」³²⁾、ルードルフ・ボルヒャルト(1877-1945)の「創造的復古 (schöpferische Restauration)」³³⁾などの発言をみても、保守革命という矛盾した概念は、表現を変えながらもたしかにヴァイマル期の右派を魅了していた、ひとつの政治的態度表明であったことがわかる。さらに、右派の思想家のみならず、R・P・ジーフェルレも指摘しているように、「『保守革命』という概念は、それが内部からも外部からも、支持者からも反対者からも使用された同時代の名称であったことから、この概念を用いるのは好都合である」³⁴⁾。

このようにしてみると、保守革命は、同時代の言論空間において広く承認されていたひとつの政治的立場であったといえる。かりに保守革命が「新しいナショナリズム」の概念に置き換えられるなら、西欧の自由主義や合理主義に反抗してきたドイツの保守主義がなぜこの時期に革命的なものへと変貌したのかという歴史的転換そのものの理解が困難になるだろう。

いまいちど、保守革命を保守主義の精神史に位置づけるために、K・レンクの『ドイツの保守主義 (Deutscher Konservatismus)』(1989)を参照しよう。レンクは、保守主義と貴族を同一視するコンディリスの保守主義理解を、特定の歴史区分のなかで詳述する立場とみなした。それに対して本章は同じくレンクを参照し、近代化の過程における時代ごとの特殊な状況を考慮して保守主義を描き出す立場をとる。それによると保守主義とは、フランス革命以降、敵対する政治的立場からの社会変革の声に対してそのつど保守すべき内容を掲げて応答する政治的立場であり、「近代 (Moderne)」における「危機的現象 (Krisenphänomen)」に**応答する思想**に他ならない³⁵⁾。

この観点に立ちながら本章は、ドイツの保守主義の**転換期**を、1920年代における**保守主義の急進化**として主題化し³⁶⁾、保守革命の思想家たちの自己省察を明らかにする。

3. 保守主義の「最終段階」としての保守革命

3-1. 保守主義の急進化の歴史的過程

カール・マンハイムが保守主義の古典的研究『保守主義の思考 (Das konservative Denken)』(1927)において指摘したように、保守的な態度と政治的な保守主義は明確に区別しなければならない。前者は、伝統社会における共同体の生活習慣や価値観を大切に、急激な変革に心理的な反発をおぼえる人間の態度、すなわち伝統主義である。後者は、フランス革命以降、現状について異議申し立てをした様々な主張に対して、個別具体的に保守すべき内容を掲げて応答する政治的イデオロギーのことを指す³⁷⁾。

それゆえ政治的な保守主義の応答は、敵対する政治運動からもたらされる深刻度によって、時代状況ごとに変化するのである。また、この意味での保守主義は、フランス革命以降、200年間近代に随伴してきた現象である。それは革命の動乱だけでなく社会構造を揺さぶる合理主義や自由主義、進歩主義などのイデオロギーに対する防衛的性格をもっており、その応答は時間的にみると、つねに遅れて発せられるものである³⁸⁾。

リベラリズムや共産主義が、理念を自己表明できるのに対して、少なくともドイツの保守主義にはいわゆる古典もなければマニフェストもない。それはただ、近代というめまぐるしく変化する時代状況に依存するかたちでしか政治的立場を表明できないのである。つまるところ保守主義は理論の敵であり、保守する内容の無規定さゆえに、「変容の過程 (Transformationsprozess) をつねに耐えてきたのであり、永遠の超越的な価値を時間の流れに融和させなければならなかった」³⁹⁾のである。

M・グライフェンハーゲンが『保守主義のジレンマ (Das Dilemma des Konservatismus in Deutschland)』(1971)で分析したところによると、保守主義は成立当初から、近代的現象でありながらも、近代の土壌において合理主義や自由主義などの近代精神にそのつど徹底抗戦をしなければならぬという特有の「ジレンマ」を孕んでいたのである⁴⁰⁾。合理主義による特定の価値や権威への反抗は同時に、こうした価値や権威を保守しなければならないという挑戦を保守主義者に促し、その時代ごとに批判と保守の「弁証法」を生みだしてきたのであった⁴¹⁾。

この特有の「ジレンマ」と「弁証法」をもつ保守主義と結びついた近代ドイツのナショナリズムは、ナポレオン支配からの解放戦争の過程において理想の文化国家像を形成しようと試みた。その際、彼らにとっての自由とは、個人の自由ではなく、ドイツ祖国の自由を意味していた。こうしてドイツ帝国における保守主義者は自身のナショナリズムの目的をドイツ国家の存続と同一視するようになったのである。

3-2. 「古典的近代の危機」と若き保守主義者の自己省察

しかしながら、第一次世界大戦の敗戦とドイツ革命による帝政の崩壊後、彼らの自己理解は一転する。というのも、これまで自明のものとされてきたナショナリズムの意味を突如失った保守

主義者たちは、あまりにも劇的な変化を前にして、現状を保守すべきいかなる理由もみいだせなかったからである。歴史学者D・ポイカートが「古典的近代の危機」としてまとめたように、1920年代のドイツは、アメリカニズムに代表される楽観主義的な進歩観や生活様式の合理化、科学の操作可能性の幻想などに支えられた理性の支配が実現することなく、かえって現実とのギャップが生まれ、急速な近代化にともなう危機的要因が先鋭化した時代であった⁴²⁾。

保守主義者は、合理主義者や進歩主義者による社会変革の要請に対してこれまで応答してきたように、この「危機」にも応答しようと試みたのであったが、事態はこれまでにないほど深刻な様相を呈していた。この状況をグライフェンハーゲンは以下のように表現している。

というも保守主義は、保持されるべき真のものとして引き合いにだしてきた社会状況との結びつきがひき裂かれてしまっていたことを同時に認識しなければならなかった。そのため保守主義は絶望的な行動の決意を固めた——保守主義は革命的になったのである⁴³⁾。

表面的には複数の方向性に関わられたようにみえるヴァイマル期の社会は実際のところ、伝統もなければ約束された未来もなかった。この状況のもとで、急進化した保守主義は社会に「基盤なき偶然性」⁴⁴⁾を感知したのである。彼らは社会が「別様にも可能であること、つまり決定的な生存基盤をもたないなら、社会は別のかたちでもありうる」⁴⁵⁾のではないのかと解釈したのであった。

「保守主義のこの最終段階」⁴⁶⁾において保守革命の思想家は、政治の主導権をめぐる旧来の保守主義とは異なる自己像を構築すべく苦心する。大戦開戦時の教養市民層は「1914年の理念(Ideen von 1914)」を旗印に、西欧文明に対してドイツ文化の優位を掲げて国民を動員したいわば知的前衛であった。しかし、19世紀的の市民とは質においても量においても異なる大衆という存在が政治の主役になった戦後の社会において、旧来の保守主義者は主導権を握ることがもはや困難になった。それだけでなく大衆は、政治的指導がさらに希薄化したヴァイマル共和国の相対的安定期(1924-1929)における指導層の役割をあらためて問いだしたのである。これに応答する若い保守革命の思想家たちは、新しい時代に適した政治理論を構築するだけでなく、知的前衛としての自己省察を試みたのであった⁴⁷⁾。

こうして戦後社会では、市民社会から大衆社会への社会構造の根本的な変化にともない、教養市民の息子である保守革命の思想家たちが自らパラダイム転換を推し進めたといえる⁴⁸⁾。それゆえブロイアーの議論に反して、保守革命は、「ドイツ帝国以来、もっとも過激でもっとも高まりをみせた行動主義的な保守主義」[強調は引用者]⁴⁹⁾として保守主義の精神史のなかに位置づけることができるのである。

4. 保守革命の黙示録的歴史思想① — ドイツの「没落」

4-1. 「没落」の予感と「救済」の願望

このように第一次世界大戦を境にドイツ人の心象風景は大きく変化したのであった。戦後社会に「没落」が影を落とした決定的な経験は、ヴァイマル共和国における内政と外交の影響であった。共和国は、内政的には国家の正統性をすでに喪失し、外交的にはヴェルサイユ条約によって主体性を剥奪されていたのである。この惨めな共和国のことをエルンスト・ユンガーは、1961年にニーキッシュに宛てた手紙のなかで、「もともと破産整理された会社であった」⁵⁰⁾と振り返っている。

また、政治哲学者 M・G・フェストルが指摘するように、権威と主体性を剥奪された共和国のドイツ人の意識には、「ドイツ帝国崩壊のショック」「経済的ショック」「レーテ共和国の赤いショック」という3つのトラウマが植えつけられていた⁵¹⁾。つまり、大戦の敗北と革命の勃発でドイツ帝国が崩壊したことによって、それまで精神的支柱となっていたドイツ人の国家や文化に対する意識が根底から揺さぶられてしまったのである。

この歴史的な破局の経験が、「没落」の予感を社会に蔓延させただけでなく、転じて「救済」の願望を呼び起こしたということを政治学者 P・ライヒェルは以下のように述べている。

戦争の敗北と皇帝の退位は文化ショックのように作用した。そしてこれに応じて国民の大多数の生活感情は、文化悲観主義的で陰鬱な没落ムードと英雄的な実存主義とのあいだを揺れ動いた。そこでは救済のユートピアと革新のヴィジョンが求められていたのである⁵²⁾。

新しい型の政治的指導者たらんとする保守革命の思想家の作品のなかに、現実のヴァイマル共和国の倒壊と未来の国民像が同時にあらわれるのは、彼らがドイツ国民の両極に揺れるこの不安定な心情をいち早く察知していたからであろう。たとえば、ホーフマンスタールがドイツの学生に向けた有名な講演『国民の精神空間としての文書 (Das Schrifttum als geistiger Raum der Nation)』(1927)のなかで「国民全員が参加できるような新しいドイツの現実」⁵³⁾を創出することの必要性をうったえかけたのは、この事情をよくあらわしている。また、シュペングラーの『西洋の没落』が奇妙な「歴史書」でありながらも戦後すぐにベストセラーとなったのは、本書が、ドイツの国民的・文化的な自己理解の揺らぎを「没落」というテーマに絡めとり、それをドイツ人が被らなければならない不可避な運命を説明するものとして人々の前に提示したからであった⁵⁴⁾。

4-2. シュペングラー『西洋の没落』、あるいはドイツの黙示録的な政治文書

シュペングラーはこの予言的な「歴史書」において、世界史を時系列的に理解するのではなく、各文化のなかに時代を超えた類型を洞察し、それらを類推的に把握しようと試みる。彼の見解に

よれば、古今東西のすべての文化には有機体に似た栄枯盛衰の型がある。文化は幼年期、成年期、老年期に至り、死を迎える。

目的が達成され、内なる可能性の充溢としての理念が完成され、現実のものとなる時、文化はとつぜん硬直する。文化は死滅し、その血は凝固し、その力は挫かれる——文化は文明 (Zivilisation) になるのだ。[強調は原文]⁵⁵⁾

このように文化が文明へと変貌し、ひとつの連関を閉じるというシュペングラーの歴史観には、キリスト教的な神の計画や、進歩史観にもとづく歴史の目的は存在しない。ましてや人間の意志が介入する余地もない。近代西洋の歴史思想としてはひととき異彩を放つこの歴史観に立ち、シュペングラーは大胆にもこれから起こりうることを予言する。つまり西洋は、「われわれに先立つ「ギリシア・ローマの没落」がそうであったように、この文明の経過と衰退の型を反復しながら、もうすぐ没落を迎えるはずである、と⁵⁶⁾。

しかしながら、シュペングラーがギリシア・ローマ文化を「アポロンの」、西洋文化を「ファウスト的」と形容しながら西洋の没落を予言するとき、彼の歴史観には亀裂が生じていることを見落としてはならない。「静態的歴史理解」をもつギリシア・ローマ人とは対照的に、西洋の「ファウスト的」人間は「歴史を目的へと向かう期待にみちた進歩として理解する」[強調は原文]⁵⁷⁾。シュペングラーはここで、歴史全体を循環史的に把握しながらも、「ファウスト的」文化をもつ西洋人だけは、進歩史観で生きてると解釈しているのである。となると、シュペングラーが予言するように今後、西洋の没落が必然であるならば、西洋人は没落を避けたい運命として冷静沈着に受けとめるのではなく、没落という未来に対して、それを自ら愛して実現させるべき態度で、つまりは「運命愛」にも似た態度で向き合うことになるはずである⁵⁸⁾。

そして注意しなければならないのは、ここで語られているのは西洋人一般ではないということである。大川勇が本書における「ファウスト的」という形容が西洋文化全体を意味しているのではなく、「無限」「内面の発展」「超越への意志」などまさに「ドイツ的」な文化の本質を意味していると指摘したように⁵⁹⁾、シュペングラーの歴史の予言がテーマにしているのは西洋の没落ではなく、正確にいえばドイツの没落のことである。したがってここには、没落という運命をドイツ人が自発的に選びとり、意志すべきであるというメッセージがみえ隠れしているのである。

したがって『西洋の没落』第二巻の最終章において、「カエサル主義」⁶⁰⁾が西洋文明に到来するという予言は、もはや歴史形態学者の類推的理解にもとづく発言ではない。それは来るべきドイツの政治形態を自力で実現するよう、没落感情にとりつかれた国民に対して発せられた政治的メッセージなのである。カール・レーヴィットにいわせれば、シュペングラーの「歴史の予言とは、自然によってあらかじめ描かれた歴史の経過を考察するような認識ではなく、ある思い切った「試み」であり、ひとつの「冒険」、つまり歴史の審判を先取りするための冒険なのである」⁶¹⁾。

『西洋の没落』の著者はその後、内政的には階級闘争をとまなう権威主義的な「プロイセン的

社会主義」国家の建設を、外交的には人種闘争の帝国主義を志向するようになる。その政治的主張の萌芽は、これまでみてきたように、「没落」という同時代言説を察知し、それを歴史思想に組み込んだこの書のなかにすでにあらわれていたのである。すなわち、『西洋の没落』はけっして客観的な世界史の叙述でも、西洋史一般の予言でもない。それはむしろ、歴史の形態学的考察という学問的客観性で装飾された、ドイツの黙示録的な政治文書なのである。

5. 保守革命の黙示録的歴史思想② — 「ライヒ」の勃興

5-1. 国民国家のアンチ・テーゼとしての「ライヒ」

『西洋の没落』とならび、保守革命の思想に広範な影響を与えたのは「ライヒ (Reich)」の理念であった。戦後のドイツ人の精神状態を、「没落」というイメージが強く襲っていたように、「ライヒ」という理念もまた、人々に過去の帝国の憧憬を抱かせつつ、同時に奇妙なリアリティを与えていた。

文献学者V・クレムペラーによると、ケルト語に語源をもつ「ライヒ」という言葉は、礼拝的で宗教的な響きをもつことから他の言語にはない神秘的な印象をドイツ人に与える⁶²⁾。そのため、「ライヒ」の理念はドイツ人にとって、近代の国民国家概念以上に長い伝統と深い意味をもち、ドイツ人の心情的な部分に強くうったえかけてきたのであった。

この言葉には魔法がかけられている。この言葉は、聖アウグスティヌスの「神の国」の夢を、紀元800年の聖夜における戴冠式を、数代にわたるオットー皇帝を、バルバロッサとルードルフ・フォン・ハーブスブルクを思い出させる。ライン河に沿ってたつすばらしい数々の大寺院、ローテンブルクの由緒ある市民の住居、ニュルンベルクの職匠歌人、同業組合、ドイツ騎士団とその本拠マリーエンブルク、リューベックとハンザ同盟の威勢、ヴォルムス国会におけるルターなどが、すなわち、美化された何世紀にもわたる絵巻がこの「ライヒ」という言葉が発せられるとき、ドイツ人のこころに浮かび上がってくるのである⁶³⁾。

ドイツの「ライヒ」の理念は古くから、「ドイツに現存する帝政が世界をおぞましい荒廃や壊滅、アンチクリストの到来から守ってくれる」⁶⁴⁾ものとして伝えられてきたように、そこには現実の圧政から人々を保護する理想郷という意味合いが付与されてきた。そのため、どの時代においても、現実が耐えがたいものであればあるほど、この理念はドイツ人のこころのなかに過去の栄光の姿をより生き活きとしたイメージで浮かび上がらせることができたのである。たとえば、ロマン主義者にとって中世の「ライヒ」の理念がフランス革命の進歩的な理念に敵対するものであったように、「ライヒ」の神話は、「現在の政治的無力の反動」⁶⁵⁾として繰り返しドイツ保守主義の精神史のなかで呼び起こされてきた。

保守主義の歴史的転換点となった1920年代における反ヴァイマル共和国の言説のなかで「ラ

イヒ」をめぐる議論は、戦後の国民国家のいきづまりとともに活性化され、特殊な位置を占めるようになる。この時代に「ライヒ」の理念が影響力をもったのは、それが敗戦国ドイツと不安定な中欧を安定させる平和の条件とみなされていたからではない。K・ヒルデブランドが指摘するように、「ライヒ」の理念は敗戦を契機に、中欧に平和と秩序をもたらす法学的概念から、共和国に対する「ナショナルな反抗 (nationale Opposition)」の政治的言説のなかで闘争的概念に変貌していたのである⁶⁶⁾。

その背景には中欧や東欧への、西欧流の自由主義思想による国民国家概念の導入と民族自決権の問題がある。パリ講和会議は、多民族が混在していた中欧と東欧に民族自決権を強引に適用した。その結果、「青年保守主義派」のユングが強く批判したように、いっけん民主的にみえるが本質的には多数決原理をとる新しい国民国家は、何ら新しい方策もないまま少数民族を抱え込むことになり、国民の忠誠心を得ようと少数民族を同化または排除したのであった。このように、中欧と東欧における国民国家概念の導入と民族自決の問題は、ヨーロッパに民族紛争や強制移住などの不安定要素を生み出していたのである⁶⁷⁾。

ただし、保守革命の思想家にとって克服すべき対象は、中欧と東欧に成立した新しい国民国家だけではなかった。「ドイツ・ライヒ (Deutsches Reich)」を正式名称にもちながらも、政党政治と多数決原理にもとづく大衆民主主義の政治形態に陥っていたヴァイマル共和国こそ乗り越えられるべき主な対象であった。こうした特殊な時代状況において、反国民国家・反ヴァイマル共和国の標語のもとにカトリック右派の思想家や「青年保守主義派」だけでなく「国民革命派」も「ライヒ」の理念に賛同したのであった⁶⁸⁾。彼らは、ヴェルサイユ条約によって主体性を奪われ、いかなる正統性ももたないヴァイマル共和国の時代を新たな「大空位時代 (Interregnum)」とみなすことで一致していた。このように、保守革命の思想家は「ライヒ」の皮をかぶったヴァイマル共和国に対するアンチ・テーゼとして、本来のドイツの再生を掲げた「ライヒ」構想にヨーロッパの救済を託すことになったのである⁶⁹⁾。

5-2. 歴史の推進力としての「三」という数字

「ライヒ」という言葉が空間的な広がりイメージさせるのに対して、「三」という数字は時間的・弁証法的な印象を与える。しかもキリスト教の黙示録の思想と密接な関係にある「第三のライヒ」という標語は、この時代の「ライヒ」の言説にもっとも強い影響を及ぼしたメラーの主著のタイトルでもあった⁷⁰⁾。

キリスト教の『黙示録』において歴史は、神の計画通りに、創世から終末そして最後の審判に至るまでの超越論的な経過として語られる。その歴史観は、本来なら、「地上の国」が終りを迎え「神の国」が到来することを人々に希望として伝える超越論的な救済史観のはずである。しかし、中世の修道僧フィオーレのヨアキムは、この歴史観を世界史の舞台に移植し、歴史の終焉を予言した。ヨアキムは、三位一体論を人間の歴史に適用し、歴史は、世の終わりという目的^{テロス}に向かって、父・子・精霊という三段階を経て完成されるであろうと主張したのであった⁷¹⁾。N・

コーンが『千年王国の追求』において明らかにしたように、人間の歴史のなかで救済が実現されるはずであるという思想は、厳しい社会情勢に苦しむ中世の民衆たちに、現在の苦難の克服可能性と千年王国の実現可能性という安易な期待をもたせた。そして彼らの情念に働きかけ、彼らを過激な社会革命へと駆り立てたのであった⁷²⁾。

ドイツ精神史において重要なのは、ヨアキムの反アウグスティヌス的な歴史神学が、世紀転換期にヘンリック・イブセンの『皇帝とガリラヤ人』(1873)やディミトリー・メレシコフスキーの『トルストイとドストエフスキー』(1901-02)を通じて、「第三のライヒ」の言説として受容されたことである⁷³⁾。このようにして受け継がれた「第三のライヒ」の言説はその後——レーヴィットの見解によると——一方では第三インターナショナルとして、他方ではナチスの第三帝国として実現されることになる⁷⁴⁾。ただしレーヴィットが、ドイツにおけるヨアキム思想の受容をきわめてドラマチックにヴァイマル共和国の破局とナチスの第三帝国の出現に接続させていることには注意が必要である。

20世紀初頭のドイツの右派の言説において、「第三のライヒ」という思想は、ナチスの占有物ではけっしてなかった。というのも、ナチズムよりも早くにメラーをはじめとする保守革命の思想家たちがこの理念を掲げて、泥沼のヴァイマル共和国から「国民(Nation)」を救済する革命思想を展開していたからである⁷⁵⁾。ドイツの黙示録的な作品を包括的に論じたK・フォンドゥングは、こうした歴史の黙示録的解釈が大戦以前からユダヤ・キリスト教の黙示録の世俗版として教養市民のなかで共有されていたことを指摘している⁷⁶⁾。保守革命の思想家のほぼ全員が教養市民層の出自であったことから、彼らが「第三のライヒ」の理念に親しみやすいことは偶然ではなかった。こうした背景もあったことから彼らは、第一次世界大戦という近代史のひとつの出来事を、ブルジョワ支配と国民国家という近代の政治形態が終焉を迎え、「第三のライヒ」を出現させるための転換点として解釈したのである⁷⁷⁾。

5-3. メラーの「第三のライヒ」と革命的黙示録

メラーは、フォン・グライフェン宛の手紙で、『第三のライヒ』が特定の政党の代弁を試みたものではないことに注意を促している。彼はむしろ「極左から極右までわれわれの時代の政治を貫く問題領域全体の立場、つまり第三の立場からのみ」⁷⁸⁾自身の思想を語ったという。彼がここでいわんとするのは要するに、ドイツの第三の道のことである。それは経済的にみれば資本主義と共産主義のあいだの立場のことであり、国際政治状況からいえばヴェルサイユとモスクワのあいだの立場のことである⁷⁹⁾。「第三」という言葉はここで、政治的領域における左翼と右翼の現在の対立を止揚し、新しい「ライヒ」を志向するための弁証法的契機として使用されていることがわかるだろう。たとえ保守革命という言葉が本書において発せられていなくとも、「第三のライヒ」という言葉には保守と革命とを止揚する立場がよくうつしだされているのである⁸⁰⁾。

メラーはヨアキムの千年王国説を歴史思想として受容しただけでなく、きわめてナショナリスティックな解釈もそこに付け加えていた。彼はまず、「第三のライヒ」を、超越論的な救済史に

における「神の国」と同一視することを退けた。次に、大戦以前のドイツ帝国に立ち返ることを「もっとも意味のないもの」⁸¹⁾として軽蔑し、復古主義の立場も一蹴した。救済史を信じてただ救いを待つことも、過去のノスタルジーにひたることも、保守革命の政治的姿勢ではなかったのである。彼が主張するのはただひとつ、目下のナショナリスティックな革命である。「第三のライヒ」はそれゆえ、政治的「行動」によって勝ちとられなければならなかったのである。

われわれが信じるのは、この第二のライヒがまず、われわれに約束された新しい究極のライヒ、つまり第三のライヒへの過渡期 (Übergang) にすぎなかったということである。われわれが生きることを欲するなら、この第三のライヒのために生きなければならないのだ⁸²⁾。

メラーによれば、「第一のライヒ」は神聖ローマ帝国を、「第二のライヒ」はドイツ帝国を意味する。輝かしいライヒの伝統を引き継いだ「第一のライヒ」とは異なり、「第二のライヒ」は西欧の真似をした自由主義的国家であり、1918年に「ドイツ・ライヒ」というヴァイマル共和国へと墮落したのである。その次の段階である「第三のライヒ」は、ヨーロッパの中央に位置するドイツが歴史的使命をもって実現すべき「最後のライヒ (Endreich)」⁸³⁾となるべきである、と彼は唱えたのであった。

かくいうメラーの歴史観には、歴史の三段階説を唱えたヨアキムの黙示録の思想が強く反映されている。というのも、この弁証法的な歴史の実現過程のなかでもとりわけ「過渡期」の「第二のライヒ」は、ヨアキムが説明したように、悲惨ではあるがしかし未来の「ライヒ」のために必要な歴史的前提条件として理解されているからである。ヨアキムの論を受容した中世の民衆運動が社会の革命運動に走ったとき、彼らは自分たちの歴史的位置を、絶望的な危機的状況を打破するための第二段階として理解していた。メラーは同様の論理を用いて、統一と充足の帝国であった「第一のライヒ」の否定として生まれた、無秩序と不足の国民国家である「第二のライヒ」を克服すべき標的に定め、ナショナリズムの革命運動を呼びかけたのである。

こうした歴史の黙示録的理解を踏まえた上でメラーの唱えた革命の意味をまとめると、それは、神聖ローマ帝国の理想に立ち返りながら19世紀の国民国家の枠組みを超える政治形態をドイツ国民が自らの手で実現することである。そして実際にメラーは、オーストリアとの再統一による秩序建設と民族の指導をドイツの使命とみなしたのであった。

5-4. 「1914年の理念」から「第三のライヒ」の理念へ

すでに大戦中の「1914年の理念」が、ヨーロッパ全体のためのドイツの使命という内容を孕んだ好戦的ナショナリズムの表現であったように、戦後の保守革命もまた国民国家を打倒し、ドイツ国民を統一するという使命に目覚めた政治思想であった。それゆえ「1914年の理念」の発展形態は、「第三のライヒ」の理念にみてとれるだろう。この理念の表現は、これまで論じたメラーの『第三のライヒ』だけでなく、シュペングラーの『プロイセン主義と社会主義

(Preußentum und Sozialismus)』(1919)にもすでにあらわれている。また同様の思想的展開は、ユングの『劣等者の支配 (Die Herrschaft der Minderwertigen)』(1930)やエルンスト・ユンガーの『労働者 (Der Arbeiter)』(1932)にも確認できよう。

シュペングラーは「プロイセン的社會主義 (preußischer Sozialismus)」という理念を打ち出し、ドイツの「青年」が経済的利益の追求や世俗的な物質利害を超えた国民統一を志すことを保守革命の政治的課題として理解していた。つまり彼は、階級分裂を克服して、「能力による位階」にもとづく新しい国家形態をうちたてることに期待を寄せたのであった⁸⁴⁾。ユングは「新しいライヒ (das neue Reich)」という理念を掲げて、神聖ローマ帝国を継承するドイツ民族の指導のもとで他民族と共生することをうったえた。そして国民国家の枠を超えた連邦主義的・多元的なゆるやかな中欧民族共同体を構想したのである⁸⁵⁾。ユンガーも「労働国 (Arbeitsstaat)」という秩序構想のもとで、国民の社会的領域すべてを近代技術によって制御することを唱えた。その際、19世紀型の自由主義的国民国家を超える20世紀型の全体主義国家を実現することをドイツの「総動員」の使命として理解していたのである⁸⁶⁾。このように、いずれも黙示録的な歴史思想の論理にそくして、墮落した国民を没落の「危機」から救済することを、ドイツの革命つまり保守革命の使命として理解していたのであった。

よく知られているように、メラーの著書は後にヨーゼフ・ゲッベルスに称賛され、第三帝国というナチス・ドイツの通称となった。しかし、この国家のなかで、黙示録の歴史思想がどのようにしてあり得たのか、あるいはどのようにして歪曲されたのかについてはさらなる議論を要する。推測されるのは、この国家では、人種主義的な原理が中心に据えられることになり、その人種差別的な言説のなかで、キリスト教的伝統にもとづきヨアキムの黙示録の思想を発展させた「ライヒ」の理念が忘却されたことであろう。

おわりに

かつてK・フォンドゥングは、ドイツの黙示録的な作品は、終わりで始まり、始まりで終わるという、救済史を逆転させた物語の枠構造をとることが多いことを指摘した⁸⁷⁾。そのため時間的には、救済史観とは異なり、過去と現在よりも未来に価値の比重がおかれる。エルンスト・ユンガーは、第一次世界大戦の大量破壊や戦死者の犠牲がけっしてむだではなく、高次の目的のためになされたのであったと追悼論のなかで語りかけ⁸⁸⁾、ユングやツェラーは文化革新へと向かった。これらは、保守革命の思想家たちが過去ではなく未来に実現すべき秩序を求めていたことを示している⁸⁹⁾。こうした彼らの未来への志向性を端的に表現しているのが、メラーの以下の発言である。

保守的な人間は、歴史がひとつの遺産であるという意識のもとで生きている。彼らは、歴史が相続であり、民族が過去から未来へ送り届けるものごとの総体であると理解している。しかしながらこの遺産は、われわれが過去と現在を理解することのできる偉大なる三 (Drei) を完成するまで、何度も獲得されなければならない。その間われわれは、未来を何度も実現し、未来のイメージで満たす必要がある⁹⁰⁾。

メラーにとって保守主義とは、伝統主義のことではけっしてなく、政治的イデオロギーに目覚めた闘争的・革命的なナショナリズムのことであった。「保守的というのは、保持するに値するものを創造することである」⁹¹⁾とメラーが自身の保守主義を規定したとき、それはこの時代の保守主義者の発言としてはなんら奇妙なものではなく、保守主義の歴史的な「最終段階」を自覚した上でなされた発言であったと理解することができる。

未来志向をもつ保守革命の「ライヒ」は、特定団体の利益追求に縛られた民主主義の政党政治を脱却するための、新しい政治の形而上学的な指導的理念として期待されていた。それゆえこの理念は、政治とドイツ精神の融和を求めた保守革命の思想家たちのところを捉えたのである。そしてきわめて重要なこととして、ドイツ民族とヨーロッパを分断する国民国家に対して、保守革命のナショナリズムが闘争性を帯びたのは、彼らの信じた「第三のライヒ」の理念に黙示録的な歴史思想が内在していたからに他ならない。保守革命の思想家たちは、黙示録文化のナショナリズム化という同時代言説のなかで、19世紀の個人主義的自由主義と国民国家原理の克服の上に築かれる中欧の新たな政治的秩序を、「第三のライヒ」のなかにみようとしたのである。

注

※本研究は JSPS 科研費 JP19K23039 の助成を受けたものである。

- 1) Stefan Breuer: *Anatomie der konservativen Revolution*. Darmstadt 1993, S. 47. プロイアーは、この心性がモーラーによって提示された「永劫回帰」の精神よりも当時の急進右派のあいだで広まっていたことを指摘するのであるが、「鉄兜団 (Stahlhelm)」やその他のナショナリストたちだけでなく、程度の差はあれ、ナチズムも例外ではなかったことを慎重に述べている。Vgl. ebd.
- 2) 松本礼二「保守主義」、今村仁司・三島憲一・川崎修編『社会思想事典』、岩波書店、2008年、294頁。それに対して、2019年に刊行された『社会思想史事典』の川合全弘による「保守革命」の記述は、この概念を学問的なものとして使用するときの難しさを指摘しつつ、この思想の射程を正確に描き出している。川合全弘「保守革命」、社会思想史学会編『社会思想史事典』、丸善出版、2019年、456-457頁を参照。
- 3) Karl Dietrich Bracher: *Die deutsche Diktatur*. Köln 1969, S. 18.
- 4) Karl Prümm: *Die Literatur des Soldatischen Nationalismus der 20er Jahre (1918-1933). Gruppenideologie und Epochenproblematik*. Kronberg 1974, S. 81.
- 5) 保守革命の1970年代までの重要な保守革命の研究は以下を参照。Klemens von Klempeler: *Konservative Bewegung. Zwischen Kaiserreich und Nationalsozialismus*. München/Wien 1962; J・F・ノイロー

- (山崎章甫・村田宇兵衛訳)『第三帝国の神話』、未来社、1980年[第3刷、初版1963年]; K・ゾントハイマー(河島幸夫・脇圭平訳)『ワイマール共和国の政治思想——ドイツ・ナショナリズムの反民主主義思想』、ミネルヴァ書房、1976年; ジョージ・L・モッセ(上村和秀・大川清丈・城達也・野村耕一訳)『フェルキッシュ革命——ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ』、柏書房、1998年。
- 6) Armin Mohler: Die konservative Revolution in Deutschland. 1918-1932. Grundriß ihrer Weltanschauungen. Stuttgart 1950. モーラーのこの研究書は指導教官のカール・ヤスパースに提出された同名の博士論文をもとにしている。本書は保守革命の先駆的研究であり、その内容をめぐって数多くの論争が生まれた。その過程で何度も加筆・修正がほどこされ、1971年に本書の第二稿が出版された。第二稿には初稿の10倍もの著作目録が備えつけられている。1989年の第三稿では、保守革命の研究書を紹介する別巻も付属されている。2003年にモーラーが亡くなり、歴史家K・ヴァイスマンが本書の作業を引き継ぎ、現在まで六版が重ねられている。Vgl. Armin Mohler/Karlheinz Weissmann: Die konservative Revolution in Deutschland. 1918-1932. Ein Handbuch. 6., völlig überarb. und erw. Aufl. Graz 2005, S. 3-8.
- 7) Vgl. Mohler, a. a. O., S. 166-172.
- 8) Vgl. ebd., S. 172-176.
- 9) Vgl. ebd., S. 176-186.
- 10) エルンスト・ユンガーの戦争小説『鋼鉄の嵐のなかで (In Stahlgewittern)』(1920)やメラーの主著『第三のライヒ (Das dritte Reich)』(1923)は「同盟青年派」の青年たちの間で読まれ、ユンガーは実際に「同盟青年派」の「シル義勇軍」の後援者でもあった。望田幸男・田村栄子『ハーケンクロイツに生きた若きエリートたち——青年・学校・ナチズム』、有斐閣、1990年、201頁を参照。
- 11) Mohler, a. a. O., S. 198-203. エルンスト・ユンガーは政治論文『「ナショナリズム」とナショナリズム』(1929)のなかでこの事件を革命的態度の試金石とみなし、ナチズムと保守革命のナショナリズムの態度を明確に区別した。Vgl. Ernst Jünger: „Nationalismus“ und Nationalismus. „Das Tagebuch“ vom 21. September 1929. In: Politische Publizistik 1919-1933. Hg. v. Sven Olaf Berggötz. Stuttgart 2001, S. 501-509.
- 12) Mohler, a. a. O., S. 8.
- 13) Ebd., S. 19.
- 14) Vgl. ebd., S. 116ff.
- 15) 保守革命がキリスト教的世界観と敵対するという主張は、モーラーの以下の発言によくあらわれている。「キリスト教が「保守革命」と相いれないという想定がうまくいくかどうかは、「保守革命」の解釈にかかっている。つまり、「直線」に対する「球体」という対立にかかっているのである」。Ebd., S. 152.
- 16) Vgl. Breuer, a. a. O., S. 39.
- 17) Mohler, a. a. O., S. 12.
- 18) モーラーが決定的な論拠もなく保守革命からナチズムを分離したことは、現代ドイツの政治的言説にも波紋をおこしている。というのは、現代ドイツの「新右翼」の言説が、ナチズムの世界観ではなく、モーラーの保守革命論の世界観を継承しているからである。これについては、フォルカー・ヴァイス(長谷川晴生訳)『ドイツの新右翼』、新泉社、2019年に詳しい。
- 19) Ernst Jünger. Handbuch. Leben-Werk-Wirkung. Hg. v. Matthias Schöning. Stuttgart 2014, S. 393.
- 20) 小野清美は、1990年代に一般的に近代の理解が変化したことを受けて、「価値規範的ではなくニュートラルで経験的な「近代」「近代化」概念を使用しつつ」保守革命研究に新たな光があてられたと解釈している。小野清美『保守革命とナチズム——E・J・ユングの思想とワイマール末期の政治』、名古

屋大学出版会、2004年、16-17頁を参照。プロイアーの保守革命論以降の代表的な研究として、Rolf Peter Sieferle: *Die konservative Revolution. Fünf biographische Skizze.* Frankfurt a. M. 1995; Roger Woods: *The Conservative Revolution in the Weimar Republic.* London 1996; Axel Schildt: *Konservatismus in Deutschland. Von den Anfängen im 18. Jahrhundert bis zur Gegenwart.* München 1998; Thomas Rohrkämmer: *Eine andere Moderne? Zivilisationskritik, Natur und Technik in Deutschland. 1880-1993.* Paderborn 1999; Daniel Morat: *Von der Tat zur Gelassenheit. Konservatives Denken bei Martin Heidegger, Ernst Jünger und Friedrich Georg Jünger 1920-1960.* Göttingen 2007; Volker Weiß: *Moderne Antimoderne. Arthur Moeller van den Bruck und der Wandel des Konservatismus.* Paderborn 2012; Milan Horňáček: *Politik der Sprache in der ›konservative Revolution‹.* Dresden 2015.

- 21) Breuer, a. a. O., S. 1.
- 22) Vgl. ebd., S. 182ff.
- 23) Vgl. ebd., S. 186f.
- 24) Vgl. ebd., S. 187-189.
- 25) Vgl. ebd., S. 189-194.
- 26) Vgl. ebd., S. 4f., 10ff.
- 27) Vgl. Panajotis Kondylis: *Konservatismus. Geschichtlicher Gehalt und Untergang.* Stuttgart 1986, S. 27.
- 28) Vgl. ebd., S. 478.
- 29) Andreas Dornheim: *Adel in der bürgerlich-industrialisierten Gesellschaft. Eine sozialwissenschaftlich-historische Fallstudie über die Familie Walburg-Zeil.* Frankfurt a. M. 1993, S. 314.
- 30) Vgl. Ernst Jünger: *Der neue Nationalismus. „Völkischer Beobachter“ vom 23./24. Januar 1927.* In: *Politische Publizistik*, S. 258-291.
- 31) Hans Freyer: *Revolution von rechts.* Jena 1931.
- 32) Edgar Julius Jung: *Sinndeutung der deutschen Revolution.* Oldenburg 1933.
- 33) Rudolf Borchardt: *Schöpferische Restauration.* In: Ders.: *Hg. v. Marie Luise Borchardt.* Stuttgart 1955, S. 230-253.
- 34) Sieferle, a. a. O., S. 22. たとえば政治的には左派の立場にいたアルフレート・デーブリーンは、ヴァイマル期のドイツ文学を「保守主義」のグループ、「人文主義」のグループ、「精神革命的 (geistesrevolutionär)」グループに分類し、最後のグループを、「非常にアクチュアルで、ときに政治的でありときに非政治的、ときに理性的でありときに神話的」であると特徴づけ、「よく知られた政治的なニュアンスで」とことわりを入れながら、エルンスト・ユンガー、アルノルト・ブロンネン (1895-1959)、エルンスト・フォン・ザロモンなど国民革命派の思想家を含めている。Vgl. Alfred Döblin: *Die deutsche Literatur (Im Ausland seit 1933). Ein Dialog zwischen Politik und Kunst.* In: Ders., *Schriften zur Ästhetik, Poetik und Literatur.* Olten 1989, S. 316-365, hier S. 316-320.
- 35) Vgl. Kurt Lenk: *Deutscher Konservatismus.* Frankfurt a. M./New York 1989, S. 13-29.
- 36) 本稿と同様の立場をとるのは、Rohrkämmer, a. a. O., S. 274ff; Horňáček, a. a. O., S. 36ff.
- 37) Vgl. Karl Mannheim: *Das konservative Denken. Soziologische Beiträge zum Werden des politisch-historischen Denkens in Deutschland.* In: Ders., *Konservatismus.* Hg. v. Hans-Gerd Schumann. 2., erw. Aufl. Königstein/Ts. 1984, S. 24-75, hier S. 26.
- 38) Vgl. Ralf Heyer: „Verfolgte Zeugen der Wahrheit“. *Das literarische Schaffen und das politische Wirken konservativer Autoren nach 1945 am Beispiel von Friedrich Georg Jünger, Ernst Jünger, Ernst von Salomon, Stefan Andres, und Reinhold Schneider.* Dresden 2008, S. 18f.

- 39) Ebd., S. 21.
- 40) Vgl. Martin Greiffenhagen: *Das Dilemma des Konservatismus in Deutschland*. München 1971, S. 37ff.
- 41) Vgl. ebd., S. 67ff.
- 42) Vgl. Detlev J. K. Peukert: *Die Weimarer Republik. Krisenjahre der klassischen Moderne*, Frankfurt a. M. 1987, S. 266-271. [デートレフ・ポイカート (小野清美・田村栄子・原田一美訳) 『ワイマル共和国——古典的近代の危機』、名古屋大学出版会、1993年、233-237頁を参照。] 本書の理解として訳者の秀逸な解説も参照されたい。小野清美「ポイカートと近代」、同書、261-273頁を参照。
- 43) Greiffenhagen, a. a. O., S. 241.
- 44) Michael Makropoulos: *Haltlose Souveränität*. In: Manfred Gangl/Gérard Raulet (Hg.): *Intellektuellendiskurse in der Weimarer Republik. Zur politischen Kultur einer Gemengelage*. Darmstadt 1994, S. 197-211, hier S. 202.
- 45) Ebd.
- 46) Greiffenhagen, a. a. O., S. 243.
- 47) ベンヤミンとユンガーを例にとり、政治的対立を超えた知的前衛のこの共通問題を政治的領域のみならず美的領域でも比較した文献として、Vgl. Marcus Llanque: *Politische Theorie in politischer Heimatlosigkeit*. Walter Benjamin und Ernst Jünger. In: Wolfgang Bialas/Georg G. Iggers (Hg.): *Intellektuelle in der Weimarer Republik*. Frankfurt a. M. 1996, S. 105-119.
- 48) 大戦後の知的世界の変貌については、スチュアート・ヒューズ (生松敬三・荒川幾男訳) 『意識と社会——ヨーロッパ社会思想 1890-1930』、みすず書房、1970年、265-290頁を参照。
- 49) Schildt, a. a. O., S. 161f.
- 50) Ernst Jünger an Ernst Niekisch, 3. Juli. 1961: A : Ernst Jünger, DLA Marbach.
- 51) Vgl. Michael G. Festl: *Scheitern an Kontingenz. Politisches Denken in der Weimarer Republik*. Frankfurt a. M. 2019, S. 12.
- 52) Peter Reichel: *Der schöne Schein des Dritten Reichs. Faszination und Gewalt des Faschismus*. München/Wien 1991, S. 70.
- 53) Hugo von Hofmannsthal: *Das Schrifttum als geistiger Raum der Nation*. In: Ders.: *Gesammelte Werke*. Hg. v. Bernd Schoeller. Bd. 3: *Reden und Aufsätze 1925-1929*. Frankfurt a. M. 1980, S. 24-41, hier S. 27. ホーフマンスタールはこの講演で、国民という全体性に対する個人の間接的関係、教養層と非教養層との断絶というドイツ特殊なシュエマに重ね合わせて論じた。だが、精神と生との緊張関係を総合するような「国民の精神空間」を創り出すことが「保守革命」の目的であると唱えた講演の論調は、政治的というよりもきわめて美的な性格を帯びている。
- 54) スチュアート・ヒューズ (川上源太郎訳) 『二十世紀の運命——シュペングラーの思想』、潮出版社、1968年、12-13頁を参照。
- 55) Oswald Spengler: *Der Untergang des Abendlandes. Umriss einer Morphologie der Weltgeschichte*. 7-10., unveränd. Aufl. Bd. 1: *Gestalt und Wirklichkeit*. München 1920, S. 154.
- 56) Vgl. ebd., S. 154f.
- 57) Ebd., S. 509.
- 58) レンクによれば、シュペングラーだけでなく、エルンスト・ユンガーやゴットフリート・ベン (1886-1956)、マルティン・ハイデガー (1889-1976) など保守革命の思想家たちはこぞってニーチェの「運命愛」を、絶望的な状況に直面したときに発揮される英雄的な徳をふるいにかける態度として受容していた。Vgl. Lenk, a. a. O., S. 113-125.
- 59) 大川勇「シュペングラーにおける「ファウスト的」なるもの」、『ドイツ文学研究』第56号、2011年、

1-20 頁、5 頁以下を参照。

- 60) Spengler, a. a. O., 1-10., Aufl. Bd. 2: Welthistorische Perspektiven. München 1922, S. 634.
- 61) Karl Löwith: Weltgeschichte und Heilsgeschehen. Zur Kritik der Geschichtsphilosophie. In: Ders.: Sämtliche Schriften. Bd. 2. Stuttgart 1983, S. 23.
- 62) Vgl. Viktor Klemperer: LTI. Notizbuch eines Philologen. Frankfurt a. M. 1975, S. 138; ノイロール、前掲書、28-29 頁も参照。Reich は翻訳困難なドイツ語のひとつである。本論では、「帝国」「国」いう訳語ではかえってこの語のもつ深い意味合いが薄れてしまうと判断し、「ライヒ」のまま表記した。
- 63) 同書、29 頁。
- 64) Herfried Münkler: Das Reich als politische Vision. In: Peter Kemper (Hg.): Macht des Mythos. Ohnmacht der Vernunft? Frankfurt a. M. 1989, S. 341.
- 65) Ebd., S. 351.
- 66) Klaus Hildebrand: Das vergangene Reich. Deutsche Außenpolitik von Bismarck bis Hitler 1871-1945. Stuttgart 1996, S. 889.
- 67) 石田勇治「帝国の幻影——神聖ローマ帝国からナチズムへ」、山内昌之・増田一夫・村田雄二郎編『帝国とは何か』、岩波書店、1997 年、181-201 頁、188-192 頁を参照。
- 68) 「ライヒ」のイデオログを分類した先行研究を詳細に紹介した小野清美によると、カトリックのイデオログは、啓示と歴史を混合し、「ライヒ」が神の秩序の地上での担い手であり、自然的に与えられた聖なる世界とみなしていた。それに対してプロテスタントのイデオログは、「ライヒ」が「神の国」の前段階ではなく、到達不可能な政治的ユートピアとして理解していた。彼らは、政治的観念を神学的に基礎づけることも、その逆もゆるさなかった。小野、前掲書、149-152 頁を参照。
- 69) たとえば、「国民革命派」のフリードリッヒ・ヒールシャーは主著『ライヒ (Das Reich)』(1931) のなかでドイツ国民の再生を以下のように表現している。「ライヒの一員であることは、永遠の新生を呼びおこす生殖能力をもち、生まれ落ちるときの陣痛と至福をともし、炎でありながら同時に蛾でもあることを意味する」。Friedrich Hielscher: Das Reich. Berlin 1931, S. 363. ヒールシャーは、炎に飛びこみ、みずからを焼いてしまう蛾に「死して成れ！」とうたう、ゲーテの詩「昇天のあこがれ (Selige Sehnsucht)」にみられる死と再生のモチーフを、大戦をくぐりぬけ、これから生まれる「ライヒ」の政治共同体に重ねあわせている。Vgl. Johan Wolfgang von Goethe. West-östlicher Divan. In: Ders. Werke. 5. Aufl. Bd. 2. Hamburg 1960, S. 18f.
- 70) C・E・ベールシュによると、「第三のライヒ」は、1929 年代以前は専門用語ではなく、さほど使用されることもなかったが、同時代の政治的イデオロギーと関係をもつことによって、「平和的・啓蒙的」な議論においても、または「フェルキッシュで人種主義的」な議論においても使用されるようになった。Vgl. Claus-Ekkehard Bärsch: Die politische Religion des Nationalsozialismus. Die religiöse Dimension der NS Ideologie in den Schriften von Dietrich Eckart, Joseph Goebbels, Alfred Rosenberg und Adolf Hitler. München 1998, S. 48f.
- 71) バーナード・マッギン (宮本陽子訳)『フィオーレのヨアキム——西欧思想と黙示的終末論』、平凡社、1997 年、159-182 頁を参照。
- 72) ノーマン・コーン (江川徹訳)『千年王国の追求』、紀伊國屋書店、2008 年を参照。
- 73) Vgl. Weiß, a. a. O., S. 176-178. また、メキシコフスキーからトーマス・マンにいたる黙示録の受容史については、小黒康正『黙示録を夢みる時——トーマス・マンとアレゴリー』、鳥影社、2001 年、164-170 頁も参照。
- 74) Vgl. Löwith, a. a. O., S. 172.
- 75) 1924 年にメラーが精神を病むときまで、ライヒ論は彼が所属していた「6 月クラブ (Juniklub)」や

機関紙『良心 (Das Gewissen)』などで広まっていた。その後も、レオポルト・ツイーグラー (1881-1951) の『ドイツ人の聖なるライヒ (Das heilige Reich der Deutschen)』(1928) やシュテファン・ゲオルゲ (1868-1933) の『新しいライヒ (Das neue Reich)』、ヒールシャーの『ライヒ (Das Reich)』(1931) などの作品によって保守革命の思想にしかと受け継がれている。

- 76) Vgl. Klaus Vondung: Die Apokalypse in Deutschland. München 1988, S. 189ff.
- 77) Vgl. Breuer, a. a. O., S. 37-39. プロイアーがここで鋭く批判しているように、保守革命の思想がキリスト教的世界観に対する攻撃であるというメラーの主張はまったくの見間違いである。
- 78) Arthur Moeller van den Bruck: Das dritte Reich. 3. Aufl. Hamburg 1931, S. 6.
- 79) メラーは当初、本書を『第三の政党 (Die dritte Partei)』と名づけようとしていた。しかしながら、政党政治のシステムを拒否するメラーの考えを理解していたリング・クライスの友人からの助言を受け入れ、『第三のライヒ』のほうドイツにおいて強いインパクトを残せると考えた結果、彼はこのタイトルに決定したという。Vgl. Hans-Joachim Schwiarskott. Arthur Moeller van den Bruck und der revolutionäre Nationalismus in der Weimarer Republik. Göttingen/Berlin/Frankfurt a. M. 1962, S. 105. このエピソードからも、「第三」と「ライヒ」を概念的に結合させることによって、西欧にはないドイツ的な政治思想を国民の前に示せるということにメラーは自覚的であったといえるだろう。
- 80) Vgl. Rolf Peter Sieferle: Die konservative Revolution und das » Dritte Reich «. In: Dietrich Harth/Jan Assmann (Hg): Revolution und Mythos. Frankfurt a. M. 1992, S.178-205, hier 182f.
- 81) Moeller, a. a. O., S. 19.
- 82) Ebd., S. 259.
- 83) Ebd., S. 260.
- 84) Vgl. Oswald Spengler: Preußentum und Sozialismus. München 1920, S. 97-99.
- 85) Vgl. Edgar J. Jung: Die Herrschaft der Minderwertigen. Ihr Zerfall und ihre Ablösung durch ein Neues Reich. Berlin 1930, S. 632-662. ユングの「新しいライヒ」構想の詳細な議論については、小野、前掲書、140-178 頁を参照。
- 86) Vgl. Ernst Jünger: Der Arbeiter. Herrschaft und Gestalt, Berlin 1932.
- 87) Vgl. Vondung, a. a. O., S. 97f.
- 88) Vgl. Ernst Jünger: Die Unvergessenen. Hg. v. Ders. Berlin 1928.
- 89) Vgl. Eric Leed: No Man's Land. Combat and Identity in World War I. Cambridge 1979, S. 75; 川合全弘「戦争体験、世代意識、文化革新——ドイツ前線世代についての一考察」、『産大法学』第33巻、3・4号、2002年、56-83頁。
- 90) Moeller, a. a. O., S. 195.
- 91) Ebd., S. 215